りっちゃんがんばれ

りっちゃんがんばれ

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19860300

モ腐サイコ100, モブ霊, 監禁, R-15

りっちゃん視点のモブ霊です。良ければどうぞお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

りっちゃんがんばれ

「ねえ律、どうかな、この服？」
今日は兄さんと霊幻さんの初デートだ。
ものすごーく紆余曲折あって、この２人は付き合う事になった。
「エクボはやめた方がいいって言うんだけど……」
兄さんはいつものちょっと着こなしが難しいキャラクターモノのポロシャツにジーンズを履いている。
正直、ダサいと思う。
でも、兄さんのすることは、間違いない筈なんだ。
「いいと思うよ」
僕は全肯定した。

その後、服は不評だったらしいんだけど、デートは大成功だったらしい。
「良かったね、兄さん」
「うん、ありがとう。律のおかげだよ」
相手の服ぐらいで不満を持つようなら霊幻さんは兄さんには相応しくない。これで良かったのだ。
「僕は何もしてないよ」
やっぱり兄さんが正しかっただけだ。

※

「律……ア◯ルセックスの仕方って分かる？」
僕はお茶を吹き出した。
「師匠から『したいのか？』って訊かれて、したいですって答えたんだけど、僕、全然分からなくて……結構大変なんだよね？」
そんなもの年上の霊幻さんがリードしてくれるだろう。
でも、兄さんが知りたいと言うのなら。
「ちょっと待ってて」
僕は３０枚ほどのレポートにまとめて、開発から結腸責めまで網羅

して兄さんに渡した。

結果、大成功だったらしい。

「ありがとう律、律のおかげだよ！おかげで師匠を足腰ガックガクにできたよ！！」
うーん、正直それは知りたくなかったかな。
「努力したのは兄さんだよ」
兄さんが霊幻さんとおやすみの電話（毎日している）をしに行ったら、ふよふよとエクボが僕の部屋に入ってきた。
「入っていいって言ってないけど」
「まあそう言うなよ。そうか、シゲオのやつ、霊幻と肉体関係を持っちまったか……」
「それがどうかしたの」
「肉欲が入るとなあ、愛情ってのは執着に変わりやすくなる。それは呪いだ。……シゲオの想いの力は強い。悪いことにならなきゃいいけどな」

そのエクボの心配が的中したかのように、それから２人の関係には少しずつすれ違いが増えていった。

「師匠が僕が浮気したって言うんだ」
珍しくぶすっとした顔で兄さんが僕に話しかけてきた。
「どうしても、って頼まれて合コンに行って、女の子とライン交換して、ちょっとやり取りしてるだけなのに……」
それは……
結構グレーかな……
でも、兄さんの方が正しいに決まってる。こんな若い男と付き合えるんだから、これぐらいは霊幻さんは目をつぶるべきなんだ。
「兄さんが正しいよ。それは浮気の内に入らないよ」
「だよね！？」
兄さんは、謝った方がいいぞ、と言うエクボに反論しながら部屋に戻っていく。

その日は霊幻さんからおやすみの電話はかかって来なかった。

次の日も、次の日も。

兄さんの精神が不安定になっていく。

「僕は悪くない……僕は悪くない！そうだよね、律？」
「うん、そうだよ」
超能力が漏れる兄さんに怯えながら、僕は全肯定する。
そうやって慰めていたら、霊幻さんから電話がかかって来た。
「もっ、もしもし！？」
ぱぁっと兄さんの顔が輝いて、通話が開始される。
『モブ、別れよう』
場が凍りついた。
兄さんは必死に言い訳をしている。
だが、霊幻さんに取り付くしまはなかった。
『さよなら』
そう言って切られた電話が、兄さんの手から落ちる。
絨毯で跳ねたスマホは、ぽさ、と音を立てて床に横たわった。
「……師匠は僕のものだ……」
ぶつぶつとそんなことを言いながら、兄さんは部屋に戻って行った。
「言わんこっちゃねぇ」
エクボがまた勝手に入ってきた。
「男ってのは一度抱いた相手に所有感を持つもんだ。それが油断に繋がったな。霊幻も頑固だからなあ、たぶんヨリを戻すのは絶望的だぜ？」
僕はキュッと唇を噛む。
トントン、と兄さんの部屋をノックして。
「兄さん、霊幻さんだって別れたく無い筈だよ。浮気が気に入らなかったなら、とりあえず謝っちゃえば？兄さんは霊幻さんと別れたくないんだよね？」

ガチャッと勢いよくドアが開く。
「そうだね律！そうしよう。師匠はホントに仕方ないなあ。僕が譲ってあげないとね」
僕はホッとした。これでどうにかなるだろう。

だけど２人は、そのまま別れてしまった。

「師匠はホントは僕のことが好きなんだ師匠は別れたくなんてないはずなんだ師匠は僕を試してるんだ師匠は僕のものだ僕のものだ僕のものだ僕のものだ僕のものだ僕のものだ僕のものだ僕のものだ」

『もう遅い』『そんなことはもうどうだっていい』『モブの気持ちはよく分かった』『そもそもこんなオッサンに付き合わせて悪かったな』

『安心しろ、もう俺もモブの事が好きじゃないから』

酷い嘘を吐いて、霊幻さんは兄さんと無理矢理別れたらしい。

その日から兄さんはおかしくなってしまった。
兄さんの中心には、霊幻さんがいたのだ。

そしてある日。

「師匠と結婚したんだよ」

そう言ってにこやかに自分の部屋を開いた兄さんの後ろに、縛られた霊幻さんがいた。

「律、お祝いしてくれるよね？」

ごくっと喉を湿らせて。

「おめでとう、兄さん」

僕は引き攣った全肯定をした。
口にガムテープを貼られた霊幻さんが必死に目で僕に助けを求めてくるのに、目を逸らす。
「病める時も健やかな時も」
兄さんはコンポで結婚行進曲をかける。
「死んでも、師匠は僕のことが好き」
そう言いながら、禍々しい呪いを放つプラチナリングを霊幻さんの左手の薬指にはめる。
「んーッ！！！！」
霊幻さんは暴れるが、超能力で押さえつけられて抵抗できない。
「僕も、死んでも師匠が好きだ」
超能力で操って、霊幻さんに兄さんはリングをはめさせる。

その日から、僕は耳栓をして寝ることになった。

「いやだ」「やめて」「たすけて」

毎晩隣から聞こえてくる『夫婦の営み』に頭痛がしてくるからだ。

なんでこうなっちゃったんだろう。

ある日、僕がどうしても出席が足りなくて授業に出なくちゃいけない兄さんに代わって、霊幻さんに食事を取らせていた時。

「いい加減諦めて、兄さんと結婚したらどうですか」
僕が言うと、驚いた顔で霊幻さんはこっちを見てきた。
「律くんは俺たちの交際に反対だと思ってた」
「反対ですけど、兄さんがそうしたいって言うなら僕はそれには賛成です。女の子のラインはブロックしたんですし、兄さんの気持ちを疑う要素は無いと思うんですけど。監禁までされてますし」
霊幻さんの指輪には、この家から出たら身体が動かなくなるとか、本当に色々な呪いがかかっている。
それはそのまま、兄さんの愛と言い換えてもいいんじゃ無いだろう

か。
「……でも、俺みたいな子供も産めないようなオッサンといるより、モブにはもっと相応しい相手がいると思わないか？」
「はあああああああああああああああ！？」
びっくりしてスプーンを取り落とした。
「告白したら５年間返事を待つことになって、その間あなたのことを一途に思い続けて、付き合ったら幸せ爆発したような顔をして、別れることになったら暴走して監禁にまで及んだ兄さんに、ですよ！？あなたより好きな人が！！出来るわけないでしょうが！！客観的に判定しろ、この馬鹿！！」
僕に捲し立てられて、きょとんとした後、霊幻さんは考え込んだ。

「律、師匠が僕と寄りを戻して結婚してくれるって！」
その夜、兄さんは嬉しそうに僕に報告してくれた。

そうして、霊幻さんは引き続き僕の家に住み続けることになった。

「お疲れ、りっちゃん」

僕の肩をポンと叩いたエクボのその手を、僕は笑顔ではたいた。

終わり